

「国語学 研究と資料」第30号刊行にあたって

桑 山 俊 彦

このたび「国語学 研究と資料」第30号を刊行することができた。会員の皆様とともに、この刊行を喜びたいと思う。

本雑誌の創刊は1976年（昭和51年）12月、会員は18名であった。早稲田大学大学院文学研究科日本文学（国語学）専攻生で、主に辻村敏樹先生の指導を受けていた者が会員となり、同人雑誌として発足した。私は当時すでに大学院を離れ、地方の国立大学に勤めていたために、創刊準備の煩瑣な作業には加わることがなかった。辻村先生を助けつつ、細川英雄氏が中心となって準備が進められた。出版にあたって、辻村先生から多額のご援助を受けている。

雑誌はタイプ印刷でもあり、垢抜けしない体裁ではあったが、創刊の喜びと意気込みが感じ取れる。

創刊の辞で、辻村先生は大略次のように述べられた。

学界には公的な雑誌もあり、ふるって投稿してほしいが、必ずしも掲載されるとは限らない。若い人の論文は未熟なために、編集委員に十分理解してもらえないきらいもある。それに対して、同人誌は、思うままを発表できる長所を持つ。

しかし、逆に、我田引水、井の中の蛙的な論となりおおせるおそれもある。それを防ぐためには、出来るだけ広く配布して、多くの人の批判を仰ぐことが大切だ。

編集後記では、細川氏がこの雑誌の刊行目的を、(1)現役の大学院生の自由な研究発表の場を作ること。(2)それによって、大学院生同士の横のつながりを深めること。(3)卒業生諸氏との交流をはかること。

の3点に集約しているが、これらは今日まで引き継がれてきている。

ところで、「国語学 研究と資料」の今日までの歩みは、決して順調であったわけではない。同人雑誌の常で、財政基盤の弱さから資金が行き詰まることがしばしば起きた。会員の話し合いの結果、定職に就いている者たちが維持会員となり、多めの会費を負担したこともあったが、やがて、文学研究科の在学生在が雑誌に執筆するという条件で、大学から刊行助成の補助金が得られるようになって愁眉を開いた。

創刊以来30年の歴史を刻んできた「国語学 研究と資料」は、高い水準を維持し、全国の研究者の間でも注目を集めている。掲載された論文に対する反響も大きなものがある。

早稲田に集う、国語学・日本語学・日本語教育専攻の院生、および卒業生が、自由に議論し、かつ研鑽の成果を問う場である「国語学 研究と資料の会」に、若い院生諸君が積極的に加わられることを期待したい。